

特255

844

特殊飼育法

大分縣蠶業試驗場



始



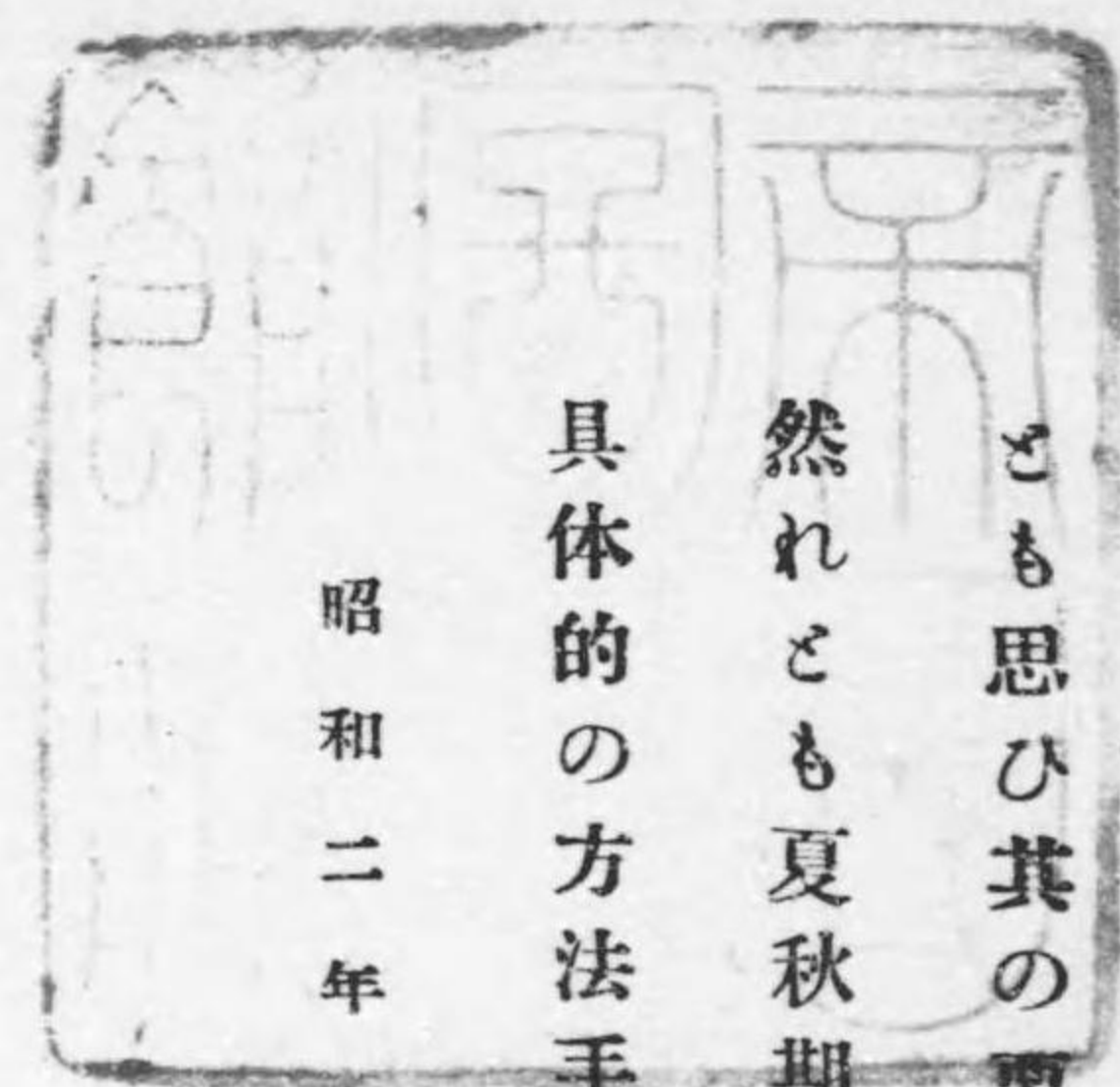


特255  
844

本書は過去三ヶ年の試験の結果を基礎とし指導者の参考資料に  
とも思ひ其の要領を編纂したり。

然れども夏秋期の變轉極まりなき氣象状態の下に於ける育蠶上  
具体的の方法手段は更に各自の考案を要す。

昭和二年六月



大分縣蠶業試験場



## 緒言

大正十二年以降引續き夏秋蠶が全國的に不作したので、斯業關係者か擧て、所謂五齡五日目病と稱する軟化病の研究をした結果、飼育上より之れを豫防する方法として、近頃は色々の飼育法か考案せられて來た事は誠に喜ぶべき現象である。而して此等の飼育法中には極めて合理的で、眞理を穿つて居り、何人にも首肯せしむるものもあるが、中には甚だしき極端な説を立て、夏秋蠶の不作は此によりてのみ解決がつく様宣傳し、養蠶家を惑はせるものも少なくない様である。

而して現在では此等の飼育法を總稱して、夏秋蠶特殊育なる名のもとに研究せられて居るから、こゝに於ても其の意味に於て、夏秋蠶特殊育と稱し此等の方法の概要を述ぶることにする。



目次

緒言

第一章

箱飼……………一

箱の構造其他……………三

箱飼の大要並に蓋の開閉……………五

給桑法……………七

除沙分箱……………八

眠除の取扱……………一〇

箱飼標準表に就て……………一二

標準表……………一七

第二章

濕布育……………一七

濕布用布……………一九

濕布育の大要……………一九



第三	給桑法	二二
	い、給桑前の注意	二一
	ろ、給桑回数	二一
	は、給桑量	二二
第四	眠起の取扱方	二三
第五	湿布除去後の注意	二四
第三章	全芽育成	二五
第一	全芽育成の方法	二八
第三	施肥	三一
第五	桑の品種	三三
第五	收穫量	三四
附録	湿布育成成績	三五
	箱飼成績	三七

## 第一章 箱飼

箱飼とは普通三齡迄主に夏秋蠶期に、ボール紙製の飼育箱内に於て飼育する方法である。此の方面の教師若くは技術者は本法を以て秋蠶晩秋蠶豊作の唯一無二の方法なるが如く考へ、一も箱飼二にも箱飼と稱する様であるが、果して斯くの如き良法なるや否やは少しく疑問とする所である。本場の試験成績(後掲)によるときは、普通育に比して特に優れりとも思はず、却て不良なる場合をも想像し得られる。之れ本場の蠶室に於ては温湿度理想的ではないが、或る程度迄調節して飼育し得られる爲めであると思ふ、

夏秋蠶期の如き、高温乾燥の期に於て、従來の如く夏秋蠶は風で飼へ式の所謂空気を横に交流させ、若しくは横に交流させねばならぬ飼育室に於て、給葉す



るも桑は直ちに萎凋して蠶兒の食葉に適せざるが如き、普通一般の養蠶家の蠶室に本法を應用するときは、其の効著しきものあらんと思ふ。要するに飼育室の條件によりて、よくもなれば悪くもなるものと考へなければならん。

されば箱飼を實行せんとする當業者は、思を此所に致し、本法の長所と短所とをよく辨へ萬遺憾なきを期せねばならん。元來本法は夏秋蠶期に蠶兒をして十分食桑せしめ、違作を免れんとする一手段にして、此の點には長所を有するも箱中にて飼育することは、多少の犠牲を考へなくてはならぬ。多少の犠牲とは箱の中に密閉することによりて、或る程度の空氣の不足と云ふことである。只此空氣の不足か蠶兒の生理を害する程度か、又は我慢の出来る程度であるかは、本法利害の岐路で、氣通と云ふ點のみより考へるときは、箱飼必すしも蠶兒の生理に適した方法と云ふことは出来ぬ。只慢然と其の外形のみを眞似、其の原

理を吞込まぬと決して満全の作を望むことは出来ぬと思ふ。以下之れが方法の  
大要を述ぶる。

### 第一 箱の構造、其他

箱の構造は如何なるものでも宜しい、只長さ三尺巾二尺深さ三寸位あれば使用上頗る便利と思ふ。深さ三寸は必要の深さで、之より浅いと所謂空氣不足となる恐がある。蓋に孔のあるとないのとある、何れにするも效果に於て大差はない様である。坊間販賣せらるゝものは如何なるものでも價額が低廉で耐久力のあるものであれば差支なからう。次に箱の二三種につき述べる。

一、**ボール函** 製造場所により多少相違があるが、價格は最も低廉で耐久力



弱く、積み重ねる事が出来ないから使用上不便のものが多い。

二、段ボール函 比較的堅牢で、耐久力も強く、積み重ねることも出来、且つ軽いから運搬にも便利である。外温變化を緩和する力もあり、一般によく使用されて居る、然し價額が少々高い憾がある。

三、木製の函 耐久力は最も強く、洗滌や消毒には便利であるが、重いから取扱には少々不便である。之れは自家に於て製造することも出来るし、造らせるとしても比較的低廉である。何れにしても材料が良く乾燥して居らないと臭氣が甚だしいから其の点を注意せねばならぬ。其他空氣の流通する窓、又は小孔の設け方に、色々あるが何れも大同小異である。

## 第二 箱飼の大要並に蓋の開閉

春蠶は左程でないが夏秋蠶の稚蠶期、殊に掃立當時は蠶座面積も箱一杯でない爲め、箱の中で飼育しても晝間は往々過乾の爲め、桑葉萎凋して蠶兒に桑不足を感せしむることがある。斯かる場合は、清水にて濡したる白布を緩く絞りと、箱内蠶座の周圍に置く様な方法で、適宜補濕する必要のある場合もあるが、概して箱飼は蠶兒に多濕を感せしむることが多い。故に晴雨寒暖乾濕に論なく、毎回給桑前に一應蓋をとつて、蠶座に氣通を計ると同時に乾燥せしめる。普通の時には給桑一時間前に此の操作を爲すのであるが、雨天の場合には此の時間を長くし、又蓋を開けた時に桑葉が全部喰ひつくされて居る場合、又は高温乾燥の時には蓋の開放時間を之より短縮する。給桑終れば直ちに蓋を閉ぢ、食桑



中無意味に蓋を開閉することは禁物である。箱の蓋を除きたる時は箱飼に非ずして普通の飼育である。箱の蓋を除いて置いても箱飼と思ふたら飛んでもない間違ひで心すべきことである。

次に雨天濕潤の時の心得であるが、給桑前に早く蓋を除く位で間に合ふ時はそれで宜いが、それでも蠶座の乾燥等よく行かぬ時は、焼糶を撒布して三十分程経て蠶座の乾燥を待つて給桑するのである。糶入後直に給桑すると藁沙の水分を吸収せず、折角給桑した新鮮の桑葉を萎凋せしめる恐れがあるから、往々蠶兒に桑不足を感せしめ、思はざる失敗を招くことがある。尙又雨桑や濡桑の使用は絶対に避けねばならぬ。要するに箱飼の要点は、給桑を萎凋せしめず、長く食桑させ、喰盡したる藁沙は速かに乾燥せしめ、蠶兒が食慾の昂進するを待ちて次回の給桑をなすと云ふこと、即ち給桑時期を人工的に造ると云ふ所に妙

味がある尙箱飼育は掃立當日より適宜蠶網を敷き置き、過濕の場合や雨天夜間などの就眠に際しては、其の敷きたる蠶網と共に蠶座を持ち上げ、箱の底に石灰の粉末若しくは焼糠等の乾燥材料を撒布し、再び其の上に載せ若しくは蠶網と共に普通の蠶箔に移して、乾燥を圖る必要がある。

### 第三 給葉法

給桑回数多小は、勞力及給葉量の多小に、重大關係があるが、徒に之れが節約のみを目的として、給葉回数の減少を計るべきでない。又丁寧にするとしても、普通育程の回数も必要でない。今茲に何回と斷定することも少々困るが、先ず普通育の七割と考へれば間違ひない。即ち秋蠶普通九回の場合には六回、



春蠶六回の場合には四回位の見當と考へれば宜しい。次に給桑量であるが、之れは普通育の一日の分量を右の回数に割當て給桑して見る、それで次の給桑に殘桑がある様なれば一回の量を減じてよいが、一日の全量を普通育の三割以上減少せぬ方がよからう。或箱飼などの標準を見ると普通育より半減と云ふ様なのも見受くるが、是は考へなければならぬ。三割迄減少することも蠶の食桑を見て、給桑に注意すべきである。何れにしても後載の標準と本場の各飼育標準を參酌して決定する必要がある。

#### 第四 除沙分箱

蠶兒發育肥大するに伴ふて蠶座を適當の廣さに擴張してやらねばならぬ事は、

普通育の場合と同様であるが、普通育より少し厚飼にする。即ち普通育より一二割蠶座を狭くするのである。又函飼育は給桑回数が少いから、給桑前必ず蠶兒の厚い所をとつて周圍へ少しづつ、擴張するとか、薄い部分に適當に配りなごとして、蠶兒の動作に支障ない様にし、尙函が狭くなれば網を使用して適宜分箱するは勿論である。又蠶座に殘桑や蠶糞が堆積すれば蒸熱を醸したり、臭氣を發散したり、濕潤に陥つたりして、蠶兒の健康を害することになるから、成る可く斯る害を防ぐために、燒糠を撒布するか除沙を適宜に行つて、蠶座の清潔を計らねばならぬ。除沙の回数は普通育よりも、給桑回数が少なく給桑した桑葉は殆ど食ひ盡されるので、蠶沙の堆積することが少いから減することが出来る。それで一齡は眠除一回、二齡は起除と眠除と二回、三齡は起除中除眠除の三回位でよい。尙分箱の際には各箱とも頭数を平均にすること、除沙分箱の



作業は、給桑前蓋の開放中敏速に行はねばならぬ。  
稚蠶中特に函飼の一、二齡の除沙は蠶兒を遺失し易い、それは函の中は暗い爲め網の上に上らない蠶が多いからである。其れで其の欠点を防ぐには、網入をした時丈けは給桑して直ちに蓋をせず開放したまゝとし、全部網の上に這ひ上つた頃を見計らつて蓋をするのである。函飼に限らず残桑がまだ乾燥せぬ内に網入をすると、蠶兒が上に昇ることが遅いから遺失蠶が多いものである。

## 第五 眠除の取扱

眠前即ち盛食期給桑を稍々多くしてなるべく大食期に飽食せしむることは普通育と變ることがないが、箱の中では大体に於て濕氣も多し、温度も室温よりは

幾分低温を感じて居ることであるから、一眠も普通育程の苦勞なしに、此等の調節を計り得ると信ずる。三眠前は非常に乾燥する時の外は先々箱飼とせず普通育とする方が安全と思ふ。之れ蠶も成長し給桑量も多くなるから密閉した箱の中は餘程注意せぬと思はぬ失敗をする、即ち三齡の盛食期からは普通育とする方よろし。但し停食後は食桑中と同様に箱の中にて保護することは悪くない様である。

眠除の網入は稍早目にする必要がある、之れ普通育より給桑回数が少ないのと、眠除後の蠶座の乾燥は稚蠶期のことで壯蠶期程の心配の必要がないからである。眠除の際は蠶座を箱より取出すのである。濕氣甚だしき時は普通の蠶箱の上に蘭網を敷き其の上に眠座を置けば相當に乾燥することゝ思ふ。蠶座を箱より取出して置く時間は、眠除後に始まり蠶座充分乾燥して点々起蠶の出初むる迄の



間で、起盛りと云ふ時期以後は必ず箱の中で蓋をして保護せなくてはならぬ。其の間の室の扱方は別に普通育と異なることはない。起揃つた後の餉食は此又普通育と同じと考へて宜しいが蓋さへとらなければ別に急ぐこともあるまい。

## 第六 箱飼標準表に就て

以上述べた要領さへ呑込めば、別に標準は要せぬと思ふが、其れでも初心者の爲めに本場の飼育を基として、別表の標準表を作成して見た。然し此標準たるや必ず不動のものでなく、時に動搖を免れぬ、要は飼育者の運用如何によつて其の働をなすものである。次に多少重複の憾はあるが使用上の注意を述べて參考とする。

一、給桑回数には五回なり六回なりに限定する必要はない、食得る桑のある際には四回でも結構である。當場の飼育室の乾燥程度であれば普通四回乃至五回位で適當である。

二、給桑量は本表を中心として各自の蠶兒の模様を見て加減すべきもので、秋蠶晩秋蠶などの温度の變化の多い時給桑量を限定することが出来るものでない。

三、給桑前蓋をとつて見た時蠶座の乾燥せる場合は、給桑時刻の如何に拘はらず直ちに給桑する必要がある。

四、眠除後は普通育とし蠶座の乾燥を計るがよい。

五、三齡の盛食期よりは著しく高温乾燥にあらざる限りは普通育が安全である。



		分分	
三〇			
計		停食	竣脱
八	合計 給桑回数 給桑量 三、六三三	經過食桑 計 絶食 三、〇九	日
五			六時
一五			夕
七〇			竣脱
計	經過食桑 計 絶食 三、一九	日	日
八		六時	七時
五		三時	一五
一七			二〇
四九			〇
			切放
			停食
			眠除
			網入
			竣脱

六、多量に飼育する場合箱を重ねることがあるが三齢には絶対禁物である。  
 七、箱より取出したる後の飼育は普通育であるが、寧ろ普通育以上の注意を以て温湿度の調節を計る必要がある。











## 第二章 濕布育

濕布育も箱飼と同様秋蠶期の稚蠶期（一、二齡間）濕布を以て蠶座を覆ひ飼育する方法である。三齡間と雖も時により濕布するとは妨げないが布を要すること多きと、普通の天候にては桑の萎凋一二齡の如く甚だしくない爲行はない。

尙覆蓋育と稱し濡さない布又は蠶箔（丸バラの如き）の如きものを覆ひ、飼育するものもあれども之れ等は箱飼の變形とも見るべきもので、茲に述ぶるものは濡したる布を覆ふを原則とする方法である。勿論覆方については別に定つた形式はなく各自の考案に任せてよい。

濡布育の目的も箱飼と同様と見て差支ない、夏秋期高温乾燥の時に蠶座に接し濕布することにより、給桑の萎凋を防ぎ、蠶兒に飽食せしむるもので、氣通と



言ふ点より見れば、箱飼同様多少の不良さを含むものと考へねばならぬ。只箱飼の如く一つ形式に固定したるものでなく、普通育（形式）に附加的に行ふ手段で、時に屈伸性を有するは尤も本法の特長とする所である。且つ濕布にて覆ふことは秋蠶期の如き高温乾燥の時には、箱飼以上温濕度の調節を計ることが出来る場合がある。従つて飼育法（主として給桑法）も箱飼と同じか又は時により箱飼以上給桑回数を減することが出来ると思ふ。私は普通一般の養蠶家の場合を考ふるに、濕布又は箱の如きにより日中の濕度を七五%内外に保ち初めて満足の飼育を爲し得るものと信するさもなければ日中は過乾の恐がある、之の恐れなしとするには勢ひ補濕（蠶室内）といふことには甚だしき努力を拂はねばならんと思ふのである。

以下要項を述べて参考に供する。

## 第一 濕布用布

布は地厚き晒木布がよい、廣さは蠶座の太さより四圍共二寸餘り長くする、布は數年間使用するも差支ないが甚だしく汚染し臭氣あるものは嫌ふを以て必ず洗濯し清潔なるを要す。

## 第二 濕布育の概要

濕布は蠶座面二寸位の間隔を置きて蠶座全面を覆ひ、蠶座の四圍に及ぼし、間隙の生せない様にする、此の場合に濕布が垂れて蠶座に接觸するのは禁物である。方法としては飼育用と同様の蠶箔を裏返して載せ其の上に濕布を覆ふか、



又は豫め濕布臺を作り、其の上に濕布を覆ふ等、何れにしても宜しい。要は二寸の間隔に濕布を支へ得れば所期の目的を達するのである。布の濕し加減は、少しく呼吸を要する所で、乾燥甚だしければ緩く、然らざれば緊く絞る等、室の乾燥程度により加減せねばならぬ。然し緩くと雖も、水滴が蠶座面に垂れる様では宜しくない。濕布用の水は、必ず汲み立ての清水を用ひねばならぬ。多少にても汚水は禁物である。濕布は給桑後直ちに覆ひ、其の儘放置し、次回の給桑前、即ち乾燥甚だしき時は二三十分前、然らざるときは一時間前に、之れを除くとは箱飼の蓋を除くこと、同じ理である。尙又甚だしく乾燥する時は、緩く絞つた濕布でも直ちに乾燥するから、更に濡して覆はねばならぬ。

### 第三 給 桑

濕布育の給桑法は、大体に於て箱飼と同じと思へば宜しい、濕布育は箱飼より桑葉の萎凋が遅い場合があるから、かゝる時に於ては自然給桑を加減せなければならぬ。普通養蠶家の飼育室の如く、秋蠶期に温濕度の調節困難な所では或は箱飼程の調節も出来ぬ場合もあると思ふ以下少しく注意の点を述ぶる。

#### い、給桑前の注意

給桑前に濕布を除くことは、既に述べた通りであるが、尙此の外に給桑前には、必ず細碎した焼粉を使用することを忘れてはならぬ。之人工的に蠶座に濕氣を補給する濕布育は、時に多濕に陥る恐れがあるばかりでなく、又高温の時であるから、糠沙の醱酵が懸念せらるゝからである。

ろ、給桑回数



給桑は長く蠶兒が食桑し得る状態にあるから、給桑回数を減少することが出来るが、普通育に比し給桑回数を半減して宜しい等と稱するものもあるけれども、蠶作の安全を期する手段でない。(本法は勞力節約の方法とせず蠶兒に飽食せしむる一方便と考ふるを要す) 然して給桑回数は蠶座の模様によつて決定すべきもので、箱飼の標準より尙一回位は減し得る時あるも、同時に雨天の如き場合には湿布を除き、普通育となし箱飼育より却て給桑回数を増すと云ふ様な變態的な方法になることもある。

は、給桑量

給桑量の定め方も箱飼の場合と同じ考へ方にて宜しい。即ち二、三割の給桑節約を計り得るも、初めより給桑量(一日の總量)を減少すべきでなく、食桑の模様によつて減し得るときは節約すると云ふ様にした。

其他到座寸法、用桑等の注意は、獨特のものでなく、普通育の注意は移して以て本法に應用することができる。

#### 第四 眠起の取扱方

眠除初入の時期は、箱飼と同じ氣持にて宜しい。眠除は次回の給桑時にする。眠除後(責桑中)は、湿布せず普通育とし、蠶座の乾燥を計らねばならん、停食後眠中は甚だしく乾燥する時の外は、湿布せず乾布の儘覆ふ位の程度にて宜しい。眠中荒風の侵入はすべて禁する所なれども、本法の湿布除去後は特に注意を要する。普通の場合は眠中(停食中)湿布せざるも、起蠶が出初めれば乾布を覆ひ、起揃を待ち餉食すること、箱飼の場合に似て居る。



### 第五 濕布除去後の注意

濕布除去後は蠶兒に環境の急變を感じしむる恐れがある、即ち給桑は三齡後と雖も、相當早く萎凋し、温濕度の變化も可成急激であるから、之等の變化に所して調節を計らねば濕布除去後に於て蠶兒を悪くする恐れがある。何れにしても濕布除去後は普通育にもざる理であるから、給桑回数なども却つて増加する場合もあると思ふ。二齡よりは三齡の方が、三齡よりは四齡の方が、給桑回数少くて宜しい等と考へれば飛んだ間違になるから注意を要する。以上大要を述べたが、其他箱飼の注意は大体に於て本法に應用して差支ないものと思ふ。要は機に臨み適當に應用せらるゝを宜しとする。

### 第三章 全芽の育成

前章に於て述べたる飼育法の用桑に就ては、別に説明を加へなかつたが、用桑は全芽（春蠶同様）を給與すれば一齡の盛食期より三齡の終り迄、更に飼育容易となり給桑回数は減少することが出来る。又普通育に於ても秋蠶晩秋蠶は、稚蠶用桑の適當のものを得るに著しく困難を感じ、多くは硬化に過ぎたるものより外得ることが出来ず、其の結果は三齡中に於て、蠶兒を不齊に陥らしむることが多い。特に晩秋蠶期の如きは外觀的には軟桑であつても、秋蠶摘桑後急激に伸長した技條の桑葉は、葉形徒に大で蠶兒には割合に硬く感せしむるものである、幸に軟な桑であるとすれば恐らく徒長技の葉である爲めに未熟桑であることが多い。



以上二項の理由から秋蠶晩秋蠶に、春蠶期の如き全芽を得れば葉形も過大とならず、成熟も充分で、且つ硬化せぬ桑葉を得らるゝことゝ信ずる。尤も茲に述べた葉形の大小と云ふことは、桑の品種によりて差があり、大葉ものは稚蠶用として不便であると云ふことは別問題で、本章述ぶる方法によるときは、同一品種なりとも葉形小となり、特殊育全芽給與にも、普通育の摘桑にも、便利に延ては蠶兒の發育も良好になると云ふ意味である。今本場に於て右の如くしたる全芽育と普通育とを比較する時は此の問題は容易に解決し得るものと思ふ。

飼育成績 (國蠶日一〇七號 × 全支二〇號 全支四號) 蟻量三瓦

項目	室内		経過日數	給桑回数	四眠起蠶百頭體量	減蠶歩合
	温度	湿度				
標準區	二七、四度	八三、六%	二〇、二日	二七回	九五、七瓦	六、六%

全芽育區	二六、九	八四、六	二〇、〇五	100	八九、一	一八、〇
------	------	------	-------	-----	------	------

### 收繭調査

項目	收繭量 (瓦)		上繭一立顆數	繭層歩合	一粒繰成績
	普通繭	同功繭其他計			
標準區	七、七五	一、三〇九	三八九、〇二	九六%	一四一瓦
全芽育區	七、二五六	一、二三四	八五八、五七五	九〇%	一三七瓦

右は一齡より三齡迄全芽育四五齡は普通育である。此の表による時は、減蠶歩合は多いけれども、其の他の成績は良好である、殊に繭の品質は非常によい様である。

以上の事柄より考へて、右全芽を育成することは、秋蠶晩秋蠶の作柄を安定せ



しむる一方法とも思はるゝので、以下之れが大要を述ぶることとする。

### 第一 全芽育成の方法

全芽育成の方法は、秋蠶掃立前梢頭を摘蕊し、技條部の葉柄を摘除するのである。摘蕊の程度は發芽容易なる品種には少く、然らざるものには多くする必要がある。技條の摘蕊は葉柄摘とするは勿論なれども、技條全部を一葉も残さず全部摘去することは發芽を甚だしく遅延せしめ、發芽するとしても芽の伸長不揃で、適當の芽を得るとは困難である。又一部を摘去する場合にも、技條の下部を摘みて上半部を残すも發芽せない、例令發芽しても先端摘蕊したる所二三芽を出すに過ぎないから摘去する葉は必ず上半部のみすることが必要である。

下半部に残す葉の数を多くすればする程發芽は良好であるが、發芽部の技條短き爲全芽の收穫量減する理であるから、半分以上残すことは此の目的に副はぬことになる。次に植付は普通桑園と同じ形式でもよいが、收穫量を多くするには少し密植する方が宜しい、密植にしても稚蠶期に大体は收穫するものであるから、葉質には何等の影響はない様である。又一株當りの收量にも關係がない。對一反歩二千本内外（畦間五尺株間一尺）の程度が適當と思ふ。但し壯蠶期に使用するものは、密植にすれば葉質を惡變せしむる恐れがあるから必ず普通桑園と同じ千本内外の植付が適當である。摘蕊摘葉の時期は、桑の品質、桑園の状態、桑の發育状態秋蠶期、晚秋蠶期、等の氣候状態により、一概に決定することは出来ぬが、本場に於て改良鼠返桑につき調査したる成績は、大体次の通りである。



區別	掃立月日	全芽施術月日		
		春刈桑園	夏刈桑園	施行後掃立適日に至る日數
舊條利用夏蠶用全芽	六月廿五日		六月五日	二十一日
春刈桑園夏蠶用全芽	六月廿五日	六月七日		十九日
秋蠶用全芽	七月廿五日	七月九日	七月十日	十七日
晚秋蠶用全芽	八月廿五日	八月十二日	八月十三日	十四日
晚々秋蠶用全芽	九月十日	八月二十六日	八月二十七日	十六日
				十五日

即ち夏蠶期に、春蠶に芽掻きにより收穫したる後の技條を伐採せず舊條の副芽を利用する時は、二十一日前收穫し條の尖端約五分の一を剪去すれば宜しい。普通秋蠶用全芽を夏刈桑園に施術する場合は十六日前に、晚秋蠶用は十三日前

に、摘蕊摘葉を行へば、掃立當日目的通り全芽を得ることが出来る。只此の際特に注意すべきは、桑園の肥培である。肥培が十分でなければ施術をしても此通り發芽せず、發芽するとしても芽の數少なく、收量が減するから、春期の施肥を十分にして置かぬ桑園は、春蠶期伐採後、新芽が五寸位延びた頃施肥するを良しとす。而して摘蕊前後に施肥することは萎縮病を誘發したり、却つて發芽を遅らしたりする傾がある。詳細は次項に述べる。尙發芽當時は嫩芽に害虫が蝟集するものであるから、此の驅除には特に注意を要する。

## 第二施肥

施肥は最も注意を要する所で次の要項によるをよしとす、但し用量は總て對一



反歩とする。

- 一、十二月下旬寒肥として、緑肥を播種してない畦の中央を少し浅く掘り、堆肥四百貫大豆粕拾五貫を施與す。
- 二、三月下旬芽出肥として、畦の中央より少し株際に人糞尿九拾貫、過磷酸石灰三貫を施與す。
- 三、四月中下旬冬作緑肥（蠶豆）を鋤込む。
- 四、六月中旬夏肥として、人糞尿九十貫、過磷酸石灰三貫、大豆粕拾五貫を施與す。
- 五、七月上旬夏作緑肥（青刈大豆）の鋤込をなす。
- 六、八月上旬硫酸アンモニア五貫、過磷酸石灰二貫を施與す。
- 七、木灰は冬作及夏作緑肥播種の際約十五貫を施用し、緑肥の鋤込には必ず

生草百貫に對し五貫位の石灰を加用する。

要するに寒肥春肥を十分に施し樹勢を旺盛にして置いて、全芽を育成する様に心掛けたい。八月以後追肥として施すことは前にも、述べた通り、返つて不良なる結果を來すから注意せねばならぬ。

### 第三 桑の品種

全芽育成の難易適否は桑の品種に關することが極めて大である。不適當なる桑では發芽が一様でなく不揃になる。適當な桑の品種は改良鼠返、露國野桑、市平等で不適當なるものは魯桑系、改良早生十文字等である。



#### 第四 收穫量

全芽の收穫量は著しく少なく、不經濟なるかの如く思ふものあれども、右は稚蠶用の全芽と、施術せざる桑園の壯蠶用の桑葉とを其の儘比較する爲めであつて、稚蠶用全芽を壯蠶期に換算するとき遙に多くなることと思ふ。詳細は本場事業報告第八號、第九號を参照せらるれば判明することと思ふが、普通栽培した桑園よりは一畝より、三齡期迄に於て十五貫乃至十九貫の收量があるから蠶量四匁は飼育することが出来る。

以上

#### 附錄 特殊育成績



濕布育成績

大正十四年度秋蠶(國蠶日一〇七號×全支一〇一號×全支一〇四號 蠶量三瓦)

項目	室內平均		經過日數	給桑回数	桑量	四眠起蠶百頭重量	減蠶步合	收購重量(斤)	計	上繭一立	繭層步合	糸長	粒度	
	溫度	濕度												
標準育	二六、七	八五、八	二、一〇	一六	一八一	七四、九	二〇、四	七、七四一、五六	九、三〇	八七	一五〇	一六、四	五九二	二、七二
濕布育	二六、四	八五、八	二、〇三	二四	一八〇	七八三、三	四八、九四一、七二	一〇、七	八六	一五五	一六、六	六〇八	二、七	

全 晚秋蠶(國蠶支一〇一號×全日一〇七號 蠶量三瓦)

標準育	二六、三	八八、九	二、〇九	二三	一九〇	七七、六	二七、七七一、二〇	八、四七	八七	一三三	一三、五	五五七	二、五八
濕布育	二六、三	八八、九	二、〇九	一〇四	一八七	七七、七	二〇、二七二、二〇	八、九六	九〇	一三五	一四、四	五七一	二、五六



大正十五年度秋蠶（國蠶日一〇七號×全支一〇一號 蠶量二瓦）

項目	室內平均經過		給桑	四眠起蠶減蠶	收繭重量(疋)	計	上繭一立	繭層	糸長	纖維度
	溫度	濕度								
標準育	二七、四	八三、六	二〇、〇	二一、七	九五、七	三九、八	一三、〇	一五、五	一三、四	五〇〇
濕布育	二七、六	八三、七	二〇、〇	二一、七	九、九	三二、一	一五、五	一三、二	一三、二	五八三

大正十五年度晚秋蠶（國蠶日一〇七號×全支一〇一號 蠶量二瓦）

項目	室內平均經過		給桑	四眠起蠶減蠶	收繭重量(疋)	計	上繭一立	繭層	糸長	纖維度
	溫度	濕度								
標準育	二六、五	八三、八	二一、〇	二一、九	八三、四	六六、七	一三、四	一四、一	一四、五	六〇〇
濕布育	二六、五	八三、七	二一、〇	二一、八	七四、六	七六、七	一〇、八	一四、一	一五、四	六〇〇

平均成績（十四年度十五年度秋蠶及晚秋蠶）

項目	室內平均經過		給桑	四眠起蠶減蠶	收繭重量(疋)	計	上繭一立	繭層	糸長	纖維度
	溫度	濕度								
標準育	二六、九	八三、八	二一、七	二一、七	八二、九	七二、五	一三、六	一四、五	一四、四	五六二
濕布育	二六、九	八三、八	二一、三	二一、四	八〇、六	八七、五	一三、〇	一四、七	一四、九	五九二

箱飼成績

大正十四年度秋蠶（國蠶日一〇七號×全支一〇一號 蠶量二瓦）

項目	室內平均經過		給桑	四眠起蠶減蠶	收繭重量(疋)	計	上繭一立	繭層	糸長	纖維度
	溫度	濕度								
標準育	二六、七	八五、八	二一、〇	二一、八	七四、九	七四、七	一五、六	一六、四	一六、四	五九一
箱育	二六、七	八五、八	二一、〇	二一、八	七、三	二八、二	一五、九	一四、七	一五、九	五六九

全 年晚秋蠶（國蠶日一〇七號×全支一〇一號 蠶量二瓦）

項目	室內平均經過		給桑	四眠起蠶減蠶	收繭重量(疋)	計	上繭一立	繭層	糸長	纖維度
	溫度	濕度								
標準育	二六、三	八八、九	二一、〇	二一、九	七七、六	七二、一	一三、〇	一四、七	一三、五	五五七
箱育	二六、三	八八、九	二一、〇	二一、七	七七、三	七五、八	一三、三	一四、三	一四、三	五三三



大正十五年度春蠶(國蠶歐七號×全七號蟻三瓦)

項目	室內平均溫度	日經過日數	給桑回数	桑量	四眠起蠶減蠶	收繭重量(斤)	上繭一立繭層	一粒繭綫度
標準育	二三.〇度	二八.一八	一一〇回	三三〇斤	九九.〇%	六.六	九.七六〇	六一〇.七
箱育	二三.〇度	二八.一八	一一〇回	三三〇斤	九九.〇%	六.六	九.七六〇	六一〇.七

大正十五年度秋蠶(日一〇七號×支一〇一號蟻量二瓦)

標準育	二七.四八	二〇.〇三	一六七	九五.七三	九八.六	三.一〇五	七.一八	九六	一五五	一三四	五〇〇	二.二四
箱育	二七.四八	二〇.〇三	一六七	九五.七三	九八.六	三.一〇五	七.一八	九六	一五五	一三四	五〇〇	二.二四

全年 晚秋蠶(國蠶日一〇七號×全支一〇一號蟻量二瓦)

標準育	二六.五八	三三.〇〇	一三六	一七九	八三.四	六.六	七.七六一	三.四	九.一〇	九八	一四二	一四.五	六二〇	二.一〇
箱育	二六.五八	三三.〇〇	一三六	一七九	八三.四	六.六	七.七六一	三.四	九.一〇	九八	一四二	一四.五	六二〇	二.一〇

平均成績(十四年度十五年度秋蠶及晚秋蠶)

標準育	二六.七八	三三.一七	一四七	一八四	八三.九二	〇.七	七.五二	一.六	八.五二	九三	一四五	一四.五	五五六	二.四二
箱育	二六.七八	三三.一七	一四七	一八四	八三.九二	〇.七	七.五二	一.六	八.五二	九三	一四五	一四.五	五五六	二.四二



313  
802

昭和二年七月十日印刷(非賣品)  
昭和二年七月十五日發行

發行所 大分縣蠶業試驗場

大分市長濱町三七三六ノ三

印刷所 長濱印刷所

大分市長濱町三五一七

印刷者 佐藤嘉太郎



終

